

令和6年度 学校評価表

品川区立日野学園

校長 守屋 直孝

日野学園校区教育協働委員会

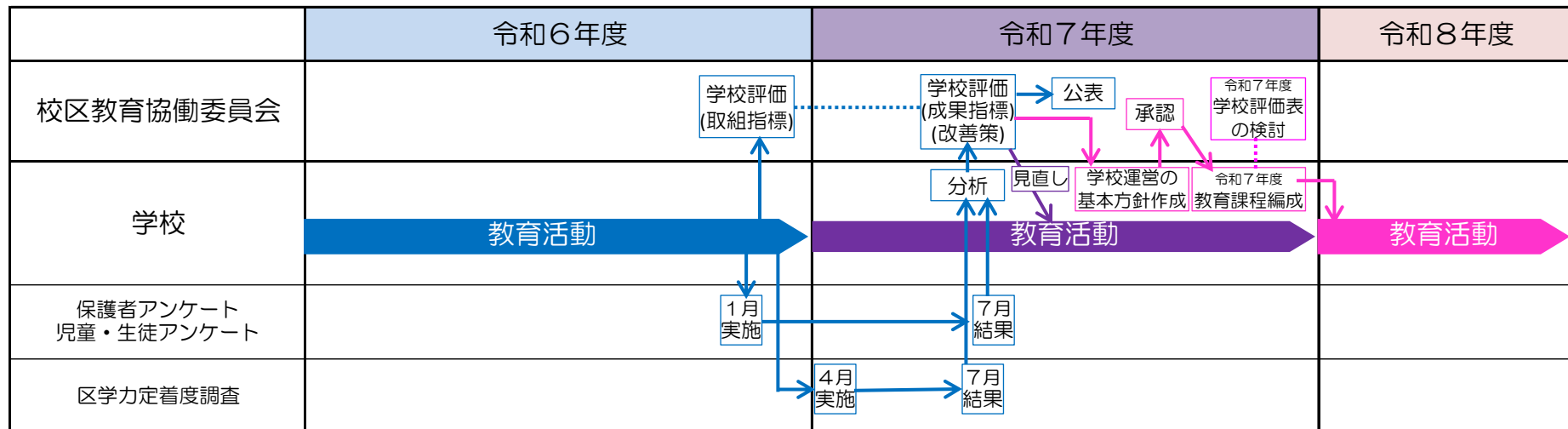
委員長 石井 久雄

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和6年度の学校評価が令和7年度および令和8年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和6年度 学校評価 品川区立日野学園

評価項目1 学力に関すること

重点目標		<p>○義務教育学校の9年間の系統的、継続的な指導を通して、学力の向上と「自学自習の体得」する力を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎基本の定着を図るため、根っこの時間、日野学タイムの時間を活用するとともに、定期的な確認テストを行うなど、「日野カリキュラム」を確実に実施する。 ・各教科でタブレット端末を活用し、表現力の向上を図るための授業改善に取り組み、校内研究を推進する。 ・少人数習熟度別学習の確実な実施により、児童生徒の個々の能力に応じた学習を行い、各自の学力を向上させる。 ・新学習指導要領や品川区立学校教育要領の全面実施を受け、教育要領に準拠した学習指導を確実に実践していく。 		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	区学力定着度調査では、校内平均正答率において、80%の教科で目標値を上回る。	実施学年・教科の80%以上の調査項目で、目標値を上回った。	A	<p>区学力定着度調査では、多くの項目で目標値を上回ったが、漢字や読み取りなどの特定の項目では改善を要する。朝の学習時間(日野タイム)を有効活用して、漢字や計算などの基礎・基本の定着を図る。</p> <p>授業の中でタブレット端末を活用する場面が増えており、児童生徒にも効率的な活用ができてきている様子が伺える。今後もタブレット端末の活用が有用と考えられる場面では積極的に活用していく。</p> <p>習熟度別学習については、加配教員を中心に進めてきている。個々の学力を分析し、より一層力をつけていけるようにする。</p>
	タブレット端末を活用し、学習内容のより一層の定着を図るため、指導方法工夫改善をねらいとした校内研究を年間10回行う。	令和5年度までの取り組みをベースとして、各教科グループを主体として研究に取り組み、指導方法の工夫改善を行った。研究授業は全教職員が学期に1回行った。講師を招いての研究授業も再開した。	A	
	年間を通して、習熟度別学習を算・数/英で実施し、個々の学力を向上させる。	習熟度別学習の実施が学力向上につながっている。区学力調査における、算・数/英の結果が良好である。	A	
②	「家で勉強する時間を決めている」と肯定的な回答をする児童生徒を80%以上にする。(区学力調査における意識調査)	区の意識調査における関連する調査項目を見ると、どの学年においても85~95%の児童生徒が、肯定的な回答をしている。	B	<p>家庭学習を自主的に行う習慣を身に付けることを目指して、段階的に取り組み方法を変えている。今後も継続していくと同時に、方法や内容の共有を全教職員間で更に進めていく。</p> <p>品川地域未来塾を活用し、補習学習に積極的に取り組むことで、満足のいく学習機会となっている児童生徒が多い。今後は活用する対象児童生徒が更に増えるように呼びかけていく。</p>
	タブレット端末を活用し、家庭学習を定着させる。家庭学習ノートや宿題の提出を毎日確認する。	令和5年度までの取り組みの継続として、eライブラリを家庭学習で活用した。特に長期休業中に、つまずきの原因に戻って学習できる、個別最適化の機能を効果的に活用できた。	A	
	品川地域未来塾を活用し、放課後補習学習を行い、個々の学習課題の解決のための機会を設定する。	補習教室を令和6年度から5-9年生を対象に実施することができた。児童生徒からは大変分かりやすかったという声が得られた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和6年度 学校評価 品川区立日野学園

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		○義務教育学校の9年間を通して、一貫教育の良さを生かした多様な「かかわり」を経験させ、人権を尊重し、豊かな人間性、社会性を育成する。 ・今年度は「時を守る」を教育活動の基本とした継続的な指導により、正しい人権感覚と高い規範意識を育てる。 ・全学年年間を通じて、計画的な市民科学習を行い、児童生徒が学んだことを日々の生活に生かすことができる指導を行う。 ・多様な交流活動を実施し、活動の中で思いやりや責任感・積極性が育つように指導する。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	「学校が楽しい」と感じている児童生徒を80%以上にする。(区学力調査における意識調査)	どの学年も80~85%の生徒が肯定的な評価をしており、全国平均を上回っている。	A	学校生活を楽しみに登校している児童生徒が多い。学力の定着が、落ち着いて自信をもって学校生活を送る一つの要因となっているため、今後も基礎・基本の定着を図りながら豊かな人間性を育てていけるようにする。 市民科の学習を通して、本校の特色である交流活動を行事等を実践していく。
	全教育活動を通じて、学力と豊かな人間性を育てる。また、品川区立学校教育要領に準拠した市民科学習を確実に実施する。	区学力調査の思いやりに関するアンケート項目の肯定率は全国平均をほとんど上回っている。市民科学習では、資質・能力の向上を目指し、各学年で実践している。	A	
②	「ルールを守って学校生活を送っている」児童生徒を80%以上にする。(区学力調査における意識調査)	どの学年も85~95%の生徒が肯定的な評価をしており、全国平均を上回っている。	A	ルールを守ろうとする意識が根付いている。必要に応じて学年の実態に合わせたルールへの見直しが必要と考える。 学校と家庭の両者であいさつを積極的に行うように促していく必要がある。保護者が参加できるようなキャンペーンの検討を行う。 地域との関わりを定期的に設定しており、とても良い機会になっている。児童生徒同士の関わりを強めていくために、エンカウンターを意図的に取り組んでいく。
	毎日、積極的な「あいさつ」ができるよう、生活委員会で「あいさつ週間」に取り組む。	「近所の人に会ったときは、あいさつをしますか。」に対する肯定的な回答が全国平均を下回る学年があった。あいさつ運動を実施しているが、あいさつを返さない児童生徒がやや多い印象がある。	B	
	「地域とのかかわり」のために、児童生徒会が主体的な取組を推進できるような指導を行う。	生徒会メンバーズカードを全児童生徒に配付して学校への所属感を高める取組を行った。また、児童生徒会新聞を通して他者と円滑に関わる方法などについて、周知した。	A	
③	「学校行事が有意義な活動だ」と感じている児童生徒を80%以上にする。(区学力調査における意識調査)	どの学年も85~90%の生徒が肯定的な評価をしており、全国平均を上回っている。	A	行事や異文化交流が活発で、児童生徒の学びが深まっている。特に義務教育学校ならではの縦のつながりや交流を絶やさず行っていくが、活動内容については学年等の裁量になっているため、内容に偏りが生じてしまっている。見通しをもちバランスよく活動計画を立てていけるよう組織化を図っていく。
	B&S・FSS・EN・たてわり活動などの異学年交流活動を通年実施する。	各ブロックで日野学タイムや市民科の時間を活用しながら、児童生徒の実態に合わせて創意工夫ある活動を通年で行っている。	A	
	運動会・文化祭・学習成果発表会などの学校行事を通じて、異学年で交流する実践を設定する。	交流する学年の教員同士が声をかけ合い、互いの演技や出し物を見せ合う機会をつくっている。その際、感想を伝え合い、児童生徒の頑張りを認め励まし合う場を設けている。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		○義務教育学校の9年間を通して、体力の向上や健康に対する意識を高めようとする力の育成を図る。 ・年間を通じて運動量を確保し、体育的活動を充実させる。 ・「しながわ多様性理解・多文化共生推進事業」の取組を通じて、共生社会の実現に向け、①ボランティアマインド・②障害者理解・③豊かな国際感覚、の三つを重点的に育成していく。 ・食や健康に関する知識や関心を高めさせる。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	体力テストにおいて、全国平均を超えている項目を前年度より増加させる。(都体力調査)	ソフトボール投げの投擲力やシャトルランの持久力など、十分ではない項目について、体育の授業の中で強化していく必要がある。	B	運動会で取り組んでいる表現など、児童生徒の良さも含めて授業改善として取り組んでいく。 塾と部活動の両立、部活動数について今後も検討していく。
	体育部が中心となり、体育授業の指導方法についての校内研修を年間3回実施する。	1学期は水泳授業についての講習会と安全確認の時間を設けた。2学期に短縄等についての実技研修会を行う。今後も複数回計画して、実施していく。	A	
②	75%以上の児童生徒が運動習慣を定着させている。(運動習慣調査)	活動制限が令和5年度よりは改善され、十分な体育的活動が実施できるようにはなった。しかしまだ運動する機会が足りない。1-4年の休み時間の過ごし方を見ると、3分の2以上の児童が外で運動をする習慣が身に付いている。	A	夏は熱中症対策上、安全面を配慮する必要があり、体育の時間や休み時間など活動制限の場面が多く見られた。場所の確保の問題もあるが、引き続き、運動する機会を減らさないよう指導の工夫を継続していく。 スポーツトライアルに関しては、記録がよく、区で表彰される児童が多いため、継続して取り組んでいく。 ポッチャやブラインドサッカーなど、地域の方々の協力を得て実施できている。引き続き、障害者理解を深められる活動を続けていく。
	品川トライアルをブロック活動に取り入れたり、期間を設定しワンミニッツエクササイズを全学年で実施したりする。	スポーツトライアルは、年に2回、できる種目を行っている。ワンミニッツエクササイズは家庭の協力も必要なため、再考が必要である。	A	
	ポッチャやブラインドサッカーなどのパラリンピック競技にふれ、障害者理解を深める。	オリンピック・パラリンピックが終わってもしながわ多様性理解・多文化共生推進事業として継続している。ブラインドサッカー(8年)やポッチャ(2年)など、外部の指導者を招いて充実した学習を行うことができた。2025デフリンピック東京大会への事前学習を準備していく。	A	
③	給食の残菜率を10%以下にする。(校内調査)	残菜率は平均約10~15%である。日々の給食において、残菜がない日が週の半数は占めている。	B	市民科一貫プランの一つの柱でもあるSDGsの学習や、食育の一つである、給食がどのように作られているか、栄養士・調理師がどのように関わっているかなどの学習を通して、感謝する心をさらに育てていくことが課題となる。偏食については家庭に啓発し、学校と家庭で連携していくことが重要である。
	1-4年、5-9年ブロックにわたり食育を行い、食事から摂る栄養の大切さを身に付けさせる。	食育年間計画に基づき、意図的・計画的に指導を進めていく。給食メニューの説明カードが、食育指導につながっている。	A	
	委員会の活動で残菜ゼロキャンペーンを実施する。	キャンペーンにより、食品ロスの意識が高まったが、依然として残菜が減らない学級が多い。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		○義務教育学校の9年間を通して、人権を尊重し、差別やいじめを根絶するために、周囲への思いやりの心を育て、自己有用感・自己肯定感を高めていく。 ・友達よさを見付け、互いを尊重する気持ちが育まれるよう指導する。児童生徒の自主的な取組を充実させる。 ・いじめの早期発見と早期解決を図るため、全教職員が全児童生徒の情報を絶えず共有し、児童生徒の心情の変化を見逃さない。いじめ対策委員会の活動を推進し、いじめの根絶と防止に努めるとともに、早期対応に取り組む。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	いじめのない学校を実現する。(いじめDアンケート・デイケン・NiCoLiの実施)	【1～6学年】認知件数79件、解消率76%(令和6年度3月時点での結果) 【7～9学年】認知件数20件、解消率60%(令和6年度3月時点での結果) ※解消率については、いじめ発覚から3か月経過した時点でいじめが継続しなかった場合を解消とする。	B	「いじめ総合対策」をもとに、未然防止の取組についてデイケン等のアンケートを活用しながら児童生徒本人と関わっている。
	毎朝の職員打ち合わせで、全体での周知が必要な配慮を要する児童生徒について情報交換を実施する。	朝の運営会議、職員連絡会、学年打ち合わせを通して要配慮児童生徒の情報交換を随時行い、共通実践を図った。	A	4月末に配慮を要する児童生徒について全体で共有し、10月も実施する予定。些細なことでも学年・学校全体で共有し、必要に応じて家庭と共有したり関係機関と連携を図ったりしていく。
	6月、11月、2月のふれあい月間の取組の充実を図る。	いじめ防止の取組の共通実践に向け、「未然防止」「早期発見」「早期対応」「重大事態への対応」について共通理解を図った。	A	ふれあい月間の機会を生かし、全職員で未然防止の共通実践に向け、共通理解を図っていく。
	毎日行う「デイケン」や毎月行う「いじめDアンケート」を実施し、児童生徒の小さなSOSサインを見逃さない。	全ての学年で「デイケン」「いじめDアンケート」を実施し、児童生徒から上がったSOSについては、担任、学年において全件対応した。	A	毎日実施し、相談等の希望があればその都度担任から声をかける。また、アンケートだけでなく、日々児童生徒の様子の変化を見落とさずに対応していく。
	いじめ対策委員会を毎週実施し、配慮を要する児童生徒の経過や、対応策について関係職員で検討する。	養護教諭、SCを含む委員会メンバーで、要配慮生徒の経過や保護者への対応等について検討し、連携を図った。	A	SCや養護教諭も含めて様々な視点から意見を出し合い、今後の対応について検討していく。懸念事項について学校全体で共有し取り組んでいく。
	配慮を要する児童生徒の保護者との連携を十分に図る。	養護教諭による情報共有を生かし、各学年、保護者と密に連絡をとり、保護者と連携を図りながら、当該児童生徒とのよりよい関係構築に取り組んだ。	A	担任、SC、養護教諭で情報を共有し、家庭と連携している。また定期的に各学年の様子を共有し合い、様々な立場で関わっていく。

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 特色ある教育活動に関すること

重点目標		○義務教育学校の良さを生かした教育活動を推進する。 ・地域との連携を深め、地域活動に積極的に参加する児童生徒を育てる。キャリア教育の推進と、自らの生き方を広げ、目標実現のためのプロセスを学ぶ。 ・前期課程と後期課程の特別支援学級の交流等、より一層充実した特別支援教育を推進する。 ・持続可能な社会の創り手を育むため、地球上で起きている様々な課題を解決することの重要性について、主体的・協働的な学びを推進する。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	地域奉仕活動や地域行事への参加について、75%以上の児童生徒が年1回以上参加する。(校内調査)	1-4年生も含め、毎回50名程度の児童生徒が参加しているが、5-9年生による75%の参加は達成されていない。	B	児童生徒会として今後もボランティアへの勧誘活動を実施していく。目標値が高い分、より一層の努力が求められる。日野愛ほっとステーションや区民まつりが、生徒会や部活動の活躍により、大きな盛り上がりを見せている。今後も継続していく。
	地域行事・地域の奉仕活動・児童生徒会活動などの地域活動を、計画的に実施する。	地域清掃については、毎月1回、計画的に実施している。児童生徒会役員生徒による呼びかけも欠かさずに行っている。日野愛ほっとステーションも本校の特色ある取組の一つとして継続できている。また、今年度も区民まつりなどにも積極的に参加した。	A	
②	キャリア教育を推進するため、地域や外部人材を活用した学習活動を全学年で実施する。	年間計画に基づき、外部人材を招いての出前授業や、社会科見学を通して取り組んでいる学年がある一方、意識的な活動が十分ではない学年も見受けられた。また、学年間で実施回数に差がみられた。	B	各学年で様々な工夫を行い、外部人材の活用、地域との繋がりを目指した活動を実施している。また、学校地域コーディネーターが地域の企業や講師と連携して、各学年のよりよい教育活動に向けて検討しながら進めている。第5学年では、地域の複数の企業に協力を仰ぎ、プラスチック素材の再利用について学習することができた。今後、学年を超えて、実施した行事の情報共有、蓄積が求められる。
	児童・生徒がSDGsについての理解を深め、SDGsの目標達成のため、一貫プラン等の市民科学学習における様々な取組を通じて、必要な資質・能力を育む。	各学年工夫しながら、SDGsについての理解が深まるように市民科学学習で取り組むことができた。5学年では、地域の企業と連携してプラスチック素材のリサイクルについて学習することができた。	A	
	学校支援地域本部の機能を活用し、ボランティアによる英語読み聞かせ活動を1-4学年で通年実施する。	保護者ボランティアによる活動を各学級年間5-6回程度計画的に実施していた。	A	
③	特別支援学級と通常級との学期に一度の交流活動等を通じて、充実した特別支援教育を推進する。	行事だけでなく、学年の活動や集会などにも積極的に共に取り組み、年間を通じて交流している。	A	運動会や交流委員会等の様々な学校行事を通して、特別支援学級と交流の機会を設けている。今後、交流学級で実施するのか、特別支援学級で実施するかなど検討していく。
	特別支援教室・特別支援学級における、前期課程と後期課程の強固な接続や様々な情報共有を通して、充実した特別支援教育を推進する。	義務教育学校の強みを生かし、特別支援教室や特別支援学級において前期課程と後期課程に関して適切に情報共有を図ることができた。また、通常級・特別支援学級の児童生徒は、相互に積極的に交流活動に取り組んでいる。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成